ある日突然、地下迷宮

ウィリアム・輝夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある日突然、地下迷宮

【Ｎコード】
Ｎ０５２７Ｗ

【作者名】
ウィリアム・輝夫

【あらすじ】
ある日、目が覚めると、俺はうす暗い洞窟の中にいた。もちろん、寝る前に洞窟に散歩しに行ったとかそういうことはない。恐らく、家の中で寝ていたに違いないのだ。それなのにどうしてこんなところにいるのだろうか。しかも、見たこともない青いジャージを着ている。俺はどうしたのだろう。誰か、助けてくれ…。
というような小説を書こうと思います。
かなりな部分、ＰＳＰのゲーム、「ゴッドイーター」をパク…い

や、リスペクトしております…。

「ある日突然、地下迷宮」

「日本海側　暴風や大雪など警戒」

という文章が俺の頭の中をよぎった。寝る前に新聞でも読んだのだろうか。よくわからないが、やけに粘り強くその文章が頭の中を反響している。そして、目が覚める。

ここはどこだろう。薄暗くて、じめじめしているが、温度は丁度よかった。洞窟みたいである。俺は、鍾乳洞の下で寝ていた。布団や毛布などはない。辺りは、真っ暗ということはなくぼんやりと光っている。

しかし、俺はこんなところに来た覚えはない。いや、そもそもが俺は誰だろうか。自分の記憶がさっぱり抜け落ちていた。

自分が若者の男性で日本人であることは知っていたが、あとは真っ白になってしまっている。そして、ふと手を見ると、右手が真っ黒になっていた。まるで、爬虫類の手みたいになっている。爪も黒く鋭く伸びていた。

「おっす。
よくきたな」

と急に俺に声をかけてきた男がいた。

黒ぶち眼鏡をかけて、黄色いジャージを着ている俺と同じ歳、多分、二十代中ごろくらいで、声がやけに低い男だった。

「俺、キー坊っていうんだ。
好物はカレーな。
よろしく」

というと、握手をしてきたが、キー坊の手も爬虫類のような手をしていた。

「黒い右手」

「ひょっとして、お前も記憶喪失かい。俺は、昨日『家政婦のミタ』ってドラマを見て、寝て、それから、ここにいるんだよ。
で、五分くらい歩いていたら、お前に会ったのさ」

キー坊は、自分の黒い手を見つめながら呟いた。

「お前の手も一緒だよな。俺は黄色いジャージ、そしてお前は青いジャージを着ている。これはどういうことなんだろうか」
「うーん。
わからない。
何かのどっきり企画とかだろうか。
にしても、二人とも記憶喪失ってのがなあ。
俺もそうなんだよ」
「俺もドラマのこと以外はまったく真っ白なもやがかかったように、わからなくなっているんだ」
「気味が悪いな」
「そうだな。
俺は自分の名前はキー坊ってのは覚えているんだ。
お前は、名前は覚えていないのかい」
「タロー。
今、俺の頭にそんな言葉がよぎったな。まあ、それじゃあ、タローにしておこうか」
「よし、これでお互いに名前を呼べるな。
ああ、よかった」

といっておいて、キー坊は少し笑う。

「まあ、何もよくはないんだがな、実際。
それにしても、この手、何だろうかね」
「うーん」

と二人が話している間に、洞窟の隅のほうにあるトンネルから腐った魚のような匂いが漂ってきた。二人が顔をしかめていると、全長６０センチくらいの巨大なオタマジャクシのような怪物が、羽根をはばたかせて、こちらに迫ってきた。

「あいつは、俺達のファンじゃないよな」

とキー坊はいった。

「怪物だよ。
逃げろ」

俺は後ろを向いて走った。

「追い詰められて…」

二人が逃げたトンネルの先は１０ｍくらいで行き止まりになっていた。後ろから、空飛ぶ巨大なオタマジャクシがやってくる。

「まあさ。
須藤茉麻。
マイ恋人にしたい芸能人ナンバーワン。
俺は死ぬ前に、お前とデートしたかったあああ」

とキー坊は泣き叫んだ。

「もうこうなったらやるしかないな」

というと俺は拳を固める。

「うりゃあああああ」

と俺はダッシュして、パンチを決めようとするが、オタマジャクシは急に後退して、空を殴る俺の体勢がおかしくなったところを再び、突進してきた。
俺はあっけなく吹っ飛ばされる。
そして、壁に頭をぶつける。

「痛い。
何だ、こいつ。
やっぱり、強い」

という暇もなく、オタマジャクシは、巨大な一つ目のすぐ下にあ

る牙を光らせて、俺の首筋を食い破ろうと近づいてきたが、

「バキッ」

そこをキー坊が蹴り上げた。

「どおおおりゃあああああ」

オタマジャクシは、弾き飛ばされるが、すぐに空中に浮かんで、咆哮をする。牙が恐ろしい。

「死ぬ。
俺は死ぬ。
何で俺はこんなところで死ななきゃいけないんだ」

頭から血を流しつつ俺はキー坊に訴えた。

「今、あいつを蹴ったんだが、ものすごく重かったよ。
足がしびれるんだ。
これは俺達じゃ適わない。
多分、これ死ぬな…」

キー坊は涙を流しながらヘラヘラ笑った。

「鬼の手、発動」

巨大オタマジャクシの怪物を前にして、俺達はとうとう命を奪われるのかと、覚悟をしていたら、不意に、俺の右手が輝いた。
俺の頭の中に、ハンマーと機関銃と巨大な盾のイメージが浮かんできたのだ。しかも、そのどれかを選ぶ必要があるらしい。俺はとっさにハンマーを選ぶと、急に

「シュッワッ」

と音がして閃光がきらめくと、右手に１ｍくらいはあるハンマーが握られていた。しかも、やけに軽い。まるで、新聞紙を丸めて握っているようなものだった。

「おうわっ。
何だこれ」

ふとキー坊の方を見ると、１ｍはある大砲を肩から提げている。

「武器だよね。
この手が光って、武器が…」

とキー坊がいっている間にオタマジャクシが襲ってきた。
俺は、ハンマーで

「ガシッ」

とぶんなぐる。
するとオタマジャクシは、血を噴出させて下がった。

「うおおおお
大砲発射あああああ」

キー坊は、砲撃をした。爆音を立て、キー坊は後ろに吹っ飛ばされそうになるが、踏みとどまる。
黒煙が辺りを多い、煙が晴れると、オタマジャクシに直撃したみたいで、真っ黒になった死体が転がっていた。
二人の手にしていた武器はさっと消える。

「あれ？
勝っちゃったよ」

キー坊は座り込んだ。

「そうだね。
多分、この手が俺達を助けてくれたんだろうけどね」
「ああ。
何でこんな目に遭うんだろうか。
振り返れば俺の人生、こんなことばかりだったような気がするな。

ま、記憶喪失で覚えていないけど」
「とにかく、この洞窟から出ないとなあ」
「はあ、面倒なことになったもんだ」

今後もこのような怪物が出てくるかもしれないが、俺達は、このままここにいてもしょうがないので、洞窟の中を進むことにした。

「これはゲームなのか？」

しばらく二人は歩いていたが、歩けども歩けども洞窟は続いていた。

「それにしても、この手、面白いな。
心の中で、念じると、ポンと、二種類の武器、あるいは、盾が出てくるんだからね」

といいながら、キー坊は、大砲と電気ノコギリと黄色い盾をひっきりなしに、出現させては消させていた。
俺も真似をして、機関銃を出したり、ハンマーを出したり、青い盾を出したり引っ込めたりしていた。

「どうも、俺達は何らかのゲームに巻き込まれたのかもしれないな。

これはまるで、俺の知っているゲームみたいなんだもの」
「どんなゲームなんだい」
「うーん。
それが思い出せないんだよ。
ひょっとしたら、誰かが、記憶をなくした方がいいだろうということで、俺達の記憶を消去しているんだな」
「そうだろうねえ。
それにしても、俺の色は黄色なのか。
黄色というと戦隊物でいえば、色物キャラだよな。
そもそも、キー坊って名前だって、黄色からきているのかもしれん。
ああ、にしても、お腹が空いてきたな。

カレーでも食べたいよ」
「ああ、そうだな」
と二人が話していると、急にご飯の匂いが漂ってきた。
キー坊は顔をしかめる。
「こんな洞窟の中に、食べ物があるというのか」
「わからん。行ってみよう」
すると、角を曲がったところに、うどん屋の屋台があった。
六十歳くらいのおじさんが椅子に座って、新聞を読んでいる。
この意外で急な展開にキー坊はすっころびそうになる。

「うわああ。
人間だ。
おい、おっさん」
「はいよ。
うどん食べるかね」
「おっさんは、ここに住んでいるのか」
「うどん、食べるかね」
「おっさあああああん」
「うどん、食べるかね」
まるでロボットのように同じ言葉を繰り返すだけであった。
「うどん…食べます」
二人は黙って椅子に座ってうどんを頼むことにした。
「やはり、これはゲームなんだ。このおじさんも作り物なんだよ。

しょうがない。うどんを食べよう。とりあえず、腹ごなしをした方がいいだろうからな」

キー坊はそういうと、たぬきうどんを頼んだ。

俺は頷くと、天ぷらうどんを頼んだ。

「吟遊詩人、真野、登場」

うどんは、薄味でありながらだしがきいていておいしかった。俺は関東人なので、濃い方を食べることに慣れていたが、たまにはこういう味もいいものだ、と思った。スウプに太目の麺がうまく合わさって、俺は、このうどんという簡単で質素な料理の奥深さを神に感謝した。もちろん、うどんだけではなく、その上に乗っている天ぷらも美味だった。特に、海老だけではなく、烏賊らしきものも入っており、その食感の差が食べるものを、独特な魅惑の世界に引き込むものであった。

「うまいなあ。
特に、体を動かした後のうどんは、これはもう、何物にも変えがたいね。まさにうどんでしか今の感動を俺に与えることはできないな」

と俺は少し涙ぐみながら呟いた。

「まったく、その通りだよ。
こんな薄暗い迷宮で、うどん屋台があって、こんなプロの手作りのうどんを食べられるなんて…
いい世の中になったものだ」

とキー坊は空を仰いで目を閉じた。
すると

「ルルルルル
ルルルルルル〜」

という歌声が聞こえる。

「うどん♪
どうして、お前はそんなにおいしいのか。
たんなる粉で作った素朴な麺なのに。
お前は、みんなを離さない。

うどん♪
今日は、素うどんに卵をかけて食べよう。
君のおいしさを生で感じたいのさ。
つるつるしこしこ、最高だ」

俺とキー坊は、新しく椅子に座った男の歌つきのギター演奏に拍手する。
彼は、緑色のジャージを着ていて、いろいろ話してみると、どうやら、俺達と境遇が同じで、記憶喪失になって、この地下迷宮の中をさ迷っているようであった。
彼は、痩せ型で、話し声が小さくて、独り言のように呟いている感じに思えた。どうやら内気な人間らしく、しかしながら、その内気さが、彼を歌というまったく正反対のベクトルの芸術に向かわせるようでもあった。

「俺は吟遊詩人の、真野っていうんだ。
よろしくね」

というと、うどんを食べる。
俺は、新しい仲間とこのおいしいうどんに乾杯したくなったが、うどん屋には酒はおいていないようであった。

「戦士達の休息」

うどん屋台で、俺達が話し込んでいると、屋台の柱時計が十一時を指した。

「おい。
もう寝る時間じゃないか」

と真野はいう。

「しかし、寝場所ないしなあ」

周囲は洞窟であり、通路は、１０ｍくらいの幅があり、高さは５ｍで、そんな中に屋台があったのであるが、しかし、さすがに寝床はなさそうであり、そこら辺に寝転がるしかないのか、と思うと、うどん屋の主人が

「ほら、すぐそこに寝床があるから、そこで寝な」

と指をさす。
そこを見ると、横穴が掘ってあった。
俺達三人は、進むと、穴は十畳くらいの部屋に広がって、ふとんが部屋の隅に畳んであった。

「なるほど、確かに寝室だな」
「もう、眠いから寝よう」
「ああ」

というと三人は、あっという間に布団を敷いて寝てしまった。
俺は、寝ている間に、この迷宮での出来事が夢だったのでは、という夢を見たのであるが、目を覚ますと、やはり洞窟の中であり、現実であった。

「さあ、今日も旅を続けるか」
「ああ」
「もう、やだよ」

等といいつ三人は、出発をする。
やはり昨日のような洞窟であったが、しかし、しばらく行くと急に崖になっていて、吊り橋があった。下の方ははるか遠くまで闇になっており、底に何があるかはわからないが、落下したら死ぬだろうな、ということはわかった。
実は、俺は恐怖症だったが、しょうがないので渡ることにした。吟遊詩人の真野は、ギターで「吊り橋の歌」という自作の歌をうたいながら渡っていた。キー坊も平気みたいだった。
ちょっとした揺れにビクビクしながらも３０ｍくらいの吊り橋を渡り終える。するとそこは、四方が崖に囲まれた部屋のような空間になっていた。部屋というよりももっと広く、１０ｍ四方はあったであろうか。

「何か嫌な予感がするんだよな」

とキー坊が呟くと、昨日見た感じのオタマジャクシが翼で空を飛びながら、向こうに吊るされている吊り橋を通ってやってきた。

「どうやら、バトル開始らしいな」

というと俺はハンマーを手に握った。

「落星」

「待て、ここは私が行こう」

というと、吟遊詩人真野は、ギターを背負い、怪しく白く光る剣を手にして、怪物の方へと歩いてゆく。

「あれが、伝説の剣、モーンブレイドか」

キー坊は腕を組んで呟く。

「そんなに有名な剣なのか」

「ああ、昨日、本人がそういっていたんだ。

彼はどうやら歴戦の戦士らしい。

俺達も、戦い方のイロハを教わらなくてはいけないかもしれないな」

「なるほど」

島のようになっている場所の真ん中で、空を飛ぶオタマジャクシと、真野は対峙した。

「さあ、こい」

と剣を構える前に、オタマジャクシはタックルをしてくる。

真野は吹っ飛ばされた。

「うぐうわあああ」

オタマジャクシはこの攻撃の成功に気をよくして、さらに勢いを

つけて、急降下してきて、真野を後退させた。

「うぬぐわあああ」

真野は、あと数歩で崖に落ちてしまいそうになる。
すると、髪をはらい、真野はニッコリと笑った。

「これぞ、まさに背水の陣というやつだな。
俺は、ピンチになるたびにワクワクしてくる性格なのだ。
ハッハッハッハ」

と笑い終わる前に、オタマジャクシは急降下してきて、危ういところを剣で弾き返し、少し後退した真野であったが、運の悪いことに、足を踏もうにもそこは崖であり、宙を踏んでしまい、あっという間に真野は落下して、崖の闇の中に消えてしまった。

「あうううううあああ
真野さん」

キー坊は、へたり込む。

「な…何てあっけない最後だ」

俺も叫んだ。

「たしかに、あっけなかったかもしれない。
だが、真野さんの落ちてゆく様はとても…とても美しかった。
まるで流星のように…。
あああああ…うぐわあああ」

キー坊は目から涙、鼻から鼻水を惜しげもなく流す。

「真野さん…。
あんた…、一体何だったんだ。
真野さん…
真野さああああああああああん」

俺は虚空に向かって叫んだ。
俺の中では、うどんをおいしそうに微笑んで食べる真野の、嬉しそうな顔が浮かび上がってきた。
そして、その姿は陽炎のようになり、ゆらめいて、涙の中に消えていった。

「弔い戦」

「ちっくしょう。
あの善人そのものの真野さんを亡き者にするなんて」

俺は立ち上がり、ハンマーを手にして走り出した。

「くううううううそおおおおおお」

とオタマジャクシに切りつけた。すると、打撃を受けたオタマジャクシは一瞬にして消えた。

「あれえええええええ。
弱っ」

俺は唖然とする。

「まさか、あいつ弱い怪物なんじゃ…」

キー坊も大砲を構える。
もう一匹いた怪物に照準を合わせて撃つとこれもあっという間に消滅した。

「うわあああ。
じゃ、じゃあ、何で真野さんは…」

俺は崖の方を眺める。

「多分、俺達の想像を越えるほど、ものすごく弱かったんだろう。
詩人としては一流だが…戦士としては…」

キー坊は空を仰いだ。

「真野さん。
天は二物を与えず、ということか」

俺はハンマーをしまい、西の方を向いて少しの間、手を合わせた。

「再会」

俺とキー坊は拍子抜けしながらも吊り橋を進み、さらに続くややこしく複雑な洞窟の中をさ迷い歩き、しばらくすると広場のようなところにたどり着く。

そこには

「たこ焼き屋『ＨＡＳＩ』」

という看板がある四角くおしゃれな二階建ての建物があった。

「いい匂いが漂ってくるなあ」

とキー坊。

二人がお店の中に入ると、驚きの展開が待っていた。

何と、さきほど死んだはずの真野が、たこ焼きを食べていたのである。

「あれえええ」

「オバケか」

と俺達は叫んだ。

「いや、違うんだよ。

よくわからないけど、気がついたらここにいたんだよ。で、たこ焼き屋ということだから、今、たこ焼きを食べているんだよ。

おいしいよ。ほら頼めばいいじゃん」

と真野は、たこ焼きを頬張った。

「あの時、流した涙は一体何だったんだろう。
まあ、でもよかった」

と二人は真野の隣に座り、

「たこ焼き二人前」

と頼んだ。
主人は、髪の少しとんがった赤い制服を着た青年であった。

「はいよおお」

と少し高めの声で答え、たこ焼きをあげる。

「あとご主人。
俺は、わさびマヨネーズね」

と俺は食べたこともない珍しいものを頼む。

「はいよおお」

と徳永英明辺りを思わせる少しハイトーンなヴォイスで、主人は答えて、たこ焼きをひっくり返す。

「真野さんはおいしいといったが、俺達グルメの舌は誤魔化せられないぜ」

とキー坊はいうと腕を組んだ。

「たこ焼き店長ハシ　前編」

俺達二人は、たこ焼きを食べた。これはとてもおいしいもので、口の中でほくほくとタコのかもし出す磯の香が広がり、しばらく恍惚感にひたっていると、作業着を着た中年男がやってきて、俺達の隣のカウンター席に座り、

「どうだ。
俺は毎日ここでハシさんの焼くたこ焼きを食べているんだ。
彼はB級グルメの王者だよ。
ガハハハハハ」

と笑うと男は、タオルで顔を拭いた。
ここの常連のゲンさんという電気工事師らしかった。
ちなみに彼も何故かこの世界にいるらしくて、毎日ぶらぶらしているらしい。

「君達、怪物退治をしようとしているね」

とハシは厨房から現れた。すらりとした長身の青年であった。

「ええ。そうだけど」

キー坊はたこ焼きを口の中でモグモグさせながら答える。

「だとしたら、この先に、猿神コンガーというやつが出てくる。
あいつには勝てないぞ」

といったのだった。
「そんな強い奴なの」
と俺。
「そうなんだ。
俺は何回か戦ったが、まったく勝てなかった。
だから、元々、たこ焼き屋だったということもあって、ここでたこ焼きを売っているんだよ」
「でも、やるしかないな。
だって、先に進まないと現実世界に戻れないみたいじゃないか」
「ああ。
それでも一回戦えばわかると思う。
勝てないよ、あいつには」
「そんなこといわないで、一緒に協力してくれよ」
と俺は頼んだ。
するとハシは暗い顔をして首を振る。
「いやあ、無理だなあ。
俺はもう、諦めているよ」
という会話をしているとゲンさんが叫んだ。
「バッキャロー！
ハシ」
というとゲンさんはハシを殴り飛ばした。

「たこ焼き店長ハシ　後編」

「ゲンさん。
あんた何をするんだ」

倒れたハシは頬をさする。口からは少量の血が流れていた。

「ハシさんよ。
あんた、心のどこかでくすぶっている炎がまだあるんだよ。
あんたは諦めちゃなんかいないんだ。
俺にはそれがしっかりとわかったよ」
「そんなことない。
猿神コンガーは、凶悪な化け物なんだぞ」
「ふっ。
でも、あんたは、この一行を見て、ひょっとして彼らと組めばあるいは、倒せるかもしれないと思ったんだよ」
「な…何でそんなことを…」

ゲンさんはたこ焼きのパックを見せた。

「俺は毎日、お前さんのたこ焼きを食べている。
お前さんのたこ焼きは感情がすぐに仕上がりに影響するんだ。
わかるんだよ。
たこ焼きの味でな。
今日は、あんたは、暗いところから抜け出そう抜け出そうというような気持ちでたこ焼きを作ったんだ。
俺も…俺も、同じことを考えていた。
だから、わかるんだよ、味がな。

お前のたこ焼きが、
『戦いたい』
と訴えているんじゃねえか」

ハシさんはうなだれる。そして何故か外人のように肩を低くして

「参ったな」

と呟いた。

「そう。さすが、ゲンさんだ。
本当は俺も戦いたいと思っている。
でも勝てるだろうか。
本当にわからないんだよ」

ゲンさんは、ハシの肩を叩く。

「俺はお前達が勝つ方に賭けるな。
何故なら、ハシさん。
あんたのたこ焼きは日々成長して、ここまでおいしくなったんだ。

やれる、今のあんたならやれるよ」
「わかった。
じゃあ、俺も参加するよ」

というとハシさんは握手を求めてきた。
俺は、その熱い光景をしばらく見ていて

「いやあ、青春っていいな」

と感心しながら握手した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0527w/

ある日突然、地下迷宮

2011年12月30日16時51分発行